



Data

監督・脚本・編集：井口奈己
原作：川上弘美『ニシノユキヒコの恋と冒険』（新潮文庫刊）
出演：竹野内豊／尾野真千子／成海璃子／木村文乃／本田翼／麻生久美子／阿川佐和子／中村ゆりか

■■■ショートコメント■■■

◆ 最近の邦画の（若者向け）恋愛モノはくだらないものが多いので、タイトルとその宣伝文句を見た段階では敬遠していたが、尾野真千子、成海璃子、麻生久美子等の女優陣の顔ぶれを見て、観賞することに。タイトルになっているニシノユキヒコを演ずる竹野内豊は、『太平洋の奇跡 フォックスと呼ばれた男』（11年）ではそれなりのいい味を出していた（『シネマルーム26』未掲載）が、さて本作では？

本作が描くニシノユキヒコは、「フラれては、モテて。モテては、フラれ。」る男らしい。また、「ルックスもよく、仕事もでき、セックスもよく、女には一も二もなく優しい。そして、女に関して懲りることを知らず、愛を求め続けた男、ニシノユキヒコ。」らしいが、さて・・・？

◆ 冒頭に見るおしゃれな喫茶店や、今ドキこんな古い映画をホントに上映しているのかなと思うようなおしゃれな映画館など、本作のカメラが映し出す風景はそれぞれ美しい。また、ストーリーのつなぎの場面に登場する風景もそれなりに美しいし、そこで流れる音楽も美しい。

しかし、映画の根幹となるストーリーのバカバカしさとセリフのバカバカしさ、そして何よりもストーリー展開のまどろっこしさは一体ナニ？直近の11月30日に観た『キャプテン・フィリップス』（13年）では、息もつけられないようなスリリングなストーリー展開に手に汗を握っただけに、本作のダラダラぶりにうんざり。ついつい、あくびの連続に・・・。

◆ 本作は茶川賞の女流作家・川上弘美の原作を映画化したものであるのに対し、井口奈己監督の前作『人のセックスを笑うな』（07年）（『シネマルーム18』207頁参照）は、第41回文藝賞を受賞した山崎ナオコ嬢の原作を映画化したものだった。その『人のセックスを笑うな』について私は、「刺激的なタイトルと永作博美主演に惹かれて観たが、

大きく期待はずれ！原作が八方美人的なら、監督のつくり方や登場人物もあまりに幼稚。そしてみるめ君のだらしなさもここに極まれり……………」と書いた。また、「井口奈己監督の映像も間延びしたものばかりだし、ユリ（永作博美）とみるめ（松山ケンイチ）との会話も、みるめとえんちゃん（蒼井優）との会話もあまりに幼稚。若者のレベルも邦画のレベルもこんなに落ちてしまったの、と唸ってしまったが……………」と書いた。さらに、デンマークの女性監督スサンネ・ビアの『アフター・ウェディング』（06年）（『シネマルーム16』63頁参照）と『ある愛の風景』（04年）（『シネマルーム16』70頁参照）と対比して、「大衆受けを狙って垂れ流される原作本を安易にスクリーン上に移し替えただけの邦画には、もううんざり！」と書いた。しかして、本作もまさにそれと同じだ。

◆ ニシノユキヒコとその周りに群がる女たちとの会話は聞くに耐えないほど幼稚なものばかり。そして、私に言わせれば、このニシノユキヒコという男は「すべての女の子の欲望に答えちゃう」ばかりで、優しいだけが取り柄の男にすぎないから、最終的に女からフラれてしまうのは当たり前だ。もっとも、こんな男女関係でも彼はしっかりセックスだけは楽しんでいるようだから罪はない……。また、くつついたり別れたりしながら、彼も周りの女たちもそれなりに人生を楽しんでいるのだから、65歳のおやじがいちいち文句をつける筋合いはないのかも……。

2013（平成25）年12月6日記